

第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 工藤 和恵

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

このシンポジウムは何年も前から行われていて、私自身も大学院生のときに発表する機会を得た(そのときは日本女子大で開催)。その後いったん中断されていたと聞いているが、3年前に再開されてから、今回初めて参加させていただいた。

1. 口頭発表に関して

2 日目に行われた口頭発表は2つのセッションに分かれており、私は情報数学物理系のセッションの発表を聴いていた。発表者は日本からの参加者が圧倒的に多く、梨花女子大からの発表者は主に学部生だったらしい。分野が広範囲にわたっており、専門とは遠い分野の話が多かったせいか、学生からの質問は少なかった。梨花女子大の教員の一人がよく質問をしてくださり、お茶大からの参加者のほとんどは、それに対してよく応答できていたと思う。

2. ポスター発表に関して

3 日目に行われたポスター発表では、梨花女子大からの参加者も多かったように見受けられた。積極的に他の参加者の発表も聴き、英語で質疑応答する様子も見られた。専門分野の離れた話題でも、ポスター発表では聴きやすかったようだった。

3. その他

日韓の学生交流は、まだ研究交流のレベルまでは達していないかもしれないが、積極的に交流しようとする姿勢がうかがわれた。日韓の学生どうしが話をしているところをよく目にした。また、教員間の交流もあり、勉強になった。

梨花女子大は非常に規模の大きい大学で、外国人教員も多く、学生の英語レベルが高いのは、その教育によるものだろうと感じられた。

第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 矢島 知子

所属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科 化学・生物化学専攻

本シンポジウムには初めて同行させていただいた。これまでで最も大勢の参加ということで、不安な点もあったが、由良先生の素晴らしい仕切りにより、円滑に進行することができた。



梨花女子大について

韓国で最も有名な女子大ということで、楽しみにしていたが、あまりの立派な施設に圧倒された。ソウル中心部に位置し、また大学の周りも毎日がお祭りのように、屋台やコスメ、洋服などの店が立ち並ぶ中にあることがまずは驚きだった。さらに、その広大な敷地の中に、たくさんの大きな建物が建ち、中にはレストランからカフェ、寮まで完備されており、規模の違いに驚いた。また、理学部エリアも広く、綺麗な実験室、講義室を有し、現在も新しい建物が建築中であった。また、寄付された建物も多くあり、愛校心の強さが伺われた。また、立派な宣伝ビデオも見せていただき、この規模の女子大を維持するには何がポイントなのだろうかと考えさせられた。

梨花女子大側では、パーティー、会場の準備、また、立派な横断幕が会場のみならず、正門横や理学部への道路にも用意されていた。梨花女子大の学生さんが、宿泊施設までの案内や、受付もして下さり、大変しっかりした印象を受けた。

また、教員との交流も図ることができた。分野を同じにする先生のみでなく、広い分野の先生方と昼食の際などにお話する機会があった。また、引き続き日本で開催された他の学会でも、韓国の他の大学の先生方と、梨花女子大の先生の話で盛り上がることもでき、人脈の幅を広げることができた。

シンポジウムについて

発表は2つの会場に分かれて行われたので、私は化学・生物分野の会場で参加させてもらったが、授業の成果を発揮し、お茶大から参加の皆さんの発表はよい出来であったと思う。梨花女子大の学生さんは既に夏休みに入っているとのことで、参加が少なかったのが残念な点ではあったが、出席してくれた学生さんとは学生同士仲良くなれたようである。梨花女子大の学生さんは英語がとても堪能で、教員に伺ったところ、アメリカへの留学経験がある人が半分ほどいるとのことであった。学生同士の質疑応答もあり、活発なシンポジウムであった。

ポスター発表においても、梨花女子大の学生さんの参加は多くなかったが、日本の学生さん同士でも活発に質疑応答を行っており、よい刺激になったと思う。

以上、二泊三日という限られた期間ではあったが、有意義な交流活動を行うことができ、無事に帰国できたことは成功だと思う。また、梨花女子大を見学できたことは、私にとってもよい経験であった。今後、ここで得た経験と人脈を生かしていければと思う。

第3回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 由良 敬

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・ライフサイエンス専攻

今回のシンポジウムにおいては、第2回に引き続き企画段階から参加させていただいた。ここでは、運営と参加学生の様子について簡単に報告する。

1. 旅程に関して

今回は初めて夏に開催することとなった。12月末の開催では、梨花女子大側の参加者があまり多くないとの先方の提案にしたがって、実験的に7月に開催することとした。

シンポジウム参加にあたっての旅程にはほとんど無理はなかったと思う。シンポジウムの開催時刻やフライトの時刻に遅れる参加者もなく、シンポジウムを無事に終えることができた。

2. 研究発表に関して

今年度は5月初旬から週1回90分間、全参加学生の英語口頭発表とパワーポイントの作成法、および質疑応答の演習を私がおこなった。練習開始の際には、参加学生の発表能力および英語力は決して高くなかったが、演習の最後には当初から比較して上達が見えてよかった。また出発1週間前にはリハーサルをおこない、6名の学生には、口頭発表司会の練習もしてもらった。シンポジウム当日においては、本学学生3名が口頭発表の司会をつとめた。昨年度は学生が口頭発表に対して質問をしないことが、教員間で非常に問題になっていたが、今回は、練習の甲斐あって、本学学生が積極的に質問をし、各自の口頭発表に対する質問に一生懸命答えていた。しかし、今年度の梨花女子大学生の発表は例年よりも数段レベルが高く、本学学生の発表技術と発表内容は、残念ならが見劣りするところがあった。次回のシンポジウムに向けて、発表の技術と発表内容を鍛えていかなければならないことを痛感した。

3. 学生の交流に関して

シンポジウム初日に、学生が主体となって行われた学生間交流のイベントは、大変よかったようである。昨年度からおこなっているイベントであるが、今年度は昨年度よりもさらに交流ができた様子である。シンポジウム期間を通して、日韓の学生が交流している様子は、大変よかった。

4. その他

今回は、3女子大学の教員の交流もかなり深まってきた感じがした。この交流を基盤に共同研究が生まれてくれればよいと感じている。シンポジウムの運営は、例年通り学部長付きのアルバイト学生(教育学部や音楽学部の学生)が、非常にこまめに補助をしており、本シンポジウムの開催の成功と継続に対する梨花女子大学理学部長の意気込みを感じた。

今回は初めての夏の開催であった。梨花女子大側からの要請で実験的に夏に移行したが、残念なことに、梨花女子大側の参加学生および参加教員が、第1回や第2回に比べて、少なくなっていた。7月中旬は多くの教員と学生が国際会議などでキャンパスを離れてしまっていることがわかった。理学部長と話し合いをした結果、次回開催する場合は、12月の初旬がよいだろうとなった。